

村上・岩船地域自立支援協議会 かわら版

～このまちに住んで良かったと言える地域づくりを目指して～

第22号（令和6年3月発行）

〈委員の方々のご紹介・リレートーク〉

今回は「村上地域振興局健康福祉部 ^{やすひさ} 園田裕久 部長」です。



～自立支援～

「自立支援」という言葉ですぐ出る言葉は「養育里親」という言葉で十数年以上前に経験した。児童相談所に里親登録してから数年かかるかも、と聞いていたが数か月で電話が来た。私たちの希望は小学校4～5年生くらいの兄弟だったが、まさか大学受験を制す高校2年生の夏休み真っ只中の生徒さんだった。

兄相の説明では18歳未満だから十分にあり得るということだった。私たちが断ったらまず養育先は見つからないだろう、ということはずぐにわかったので、事情よりもとにかく引き受けることにした。そして今は無事に大学を卒業し社会人となって暮らしている。

「里親」登録すると研修会に参加して勉強するが、その時に学んだことは「児童福祉法は児童のためにある。」ということと里親制度もこの法律に基づいているということだった。その頃は養育里親と養子縁組里親の区別は明確ではなく一緒に研修であったが、養子縁組里親の方は、児童を選ぶという雰囲気強く、私たち養育里親は選ばれるといった雰囲気が強かったように思う。とにかく私たち夫婦は新しい家族の気持ちを聞き、相談しながら進めることを目標とした。

どこまでかなえられるかはわからなかったがチャレンジあるのみだった。ホワイトボードを買ってきて勉強に付き合った。とにかくよく勉強した。3年生になって大学に進学したいと言ったので驚いたが、その後も成績は良くなって行き、進学した。その頃は進学費用制度がなかったに等しかったが私たちはうれしかった。

大学を卒業し巣立っていったので私たちは里親登録を休むことにした。以来十数年経つが私は未だに達成したという感覚がない。理由はあの子が「いい人」だったので終了まで来られたという気持ちが強く、二度はできないだろうと思うからである。たとえば単身赴任とか家族の健康とか自身の年齢とか等々があの頃重なっていたら私たちは「いい人」だったのだろうか。である。あの子は一見すればなんでもない子に見えるが家庭環境に不幸が存在したから要保護となってしまった。その心が自立しているところをいつかは見てみたい。